

## 日本経済政策学会編『経済政策学の誕生』

東京 勁草書房 1988.5 XIII, 644p

稲 毛 満 春\*

本書は、日本経済政策学会創立40周年記念事業の一環として刊行されたものである。3部に分れていて、第1部「日本における経済政策学の誕生と形成」は、学会創立（昭和15年）の経緯や戦時下の学会状況、また戦後の学会再建（昭和24年）後の経済政策学再構築をめぐる初期の熱っぽい雰囲気など、についての座談会や対談、および『国民経済雑誌』（神戸大学）に記録されている創立当時の学会運営状況についての貴重な資料、を収録している。

昭和15年5月に「現下我が国非常時局に際し協力して経済政策の研究を促進」する必要に鑑み、「経済政策に関係ある全国の学徒相集り純学問的態度を堅持しつつ理論実際に互って我が国経済政策の進展をはかる」という目的のもとに組織されたこの学会は、東京神田の一橋講堂で創立大会を開いている。その際、部会としては経済政策総論、農業政策、社会政策、工業政策、金融政策、交通政策という、テーマ別というよりもむしろ分野別の6部会が

おかれており、まさに総合経済政策学会の観を呈していた。戦後になって、多くのものが専門学会としてそれぞれ独立したが、経済政策学会自体の「総合性」という特徴はその後も長く保持され、今日ではむしろ新たな役割が期待されつつあるといえよう。

第2部「日本の経済政策史と経済政策学」は本書の分量の大部分を占めるものであるが、これは日本経済政策学会年報に掲載された諸論文のうち「経済政策学の形成・発展に重要な役割を果たした」（「あとがき」より）と考えられるものの複製である。これらは7つのグループ、すなわち「経済政策行動の原理」「経済政策論の対象と方法」「復興再建期における政策論」「高度成長期の政策論」「高度成長の反省期」「産業構造の転換」「行政改革・国際化・技術革新の政策論」に分けられ、各グループについて4～7編、合計33編の論文が収録されている。

第3部「学会にみる政策史と学説史の展開」には、長らく学会の代表理事

\* いなげ みつはる 名古屋大学教養部

を務められた故山中篤太郎教授の「回想——日本経済政策学会35年」、戸田信正氏による「年報にみる日本経済政策学会の展開——共通論題を中心として」、野本淳子氏による「戦後日本経済の発展と学会史」、および戸田氏の手になる付表、すなわち「各年度共通論題名一覧表」および「日本経済政策学会年報の総目次・総索引（人名索引）」が収録されている。昭和25年の戦後再建第2回大会における共通論題「日本経済の自立の条件」から昭和61年大会の「民間活力と国家規制——民営化問題をめぐって」や昭和62年大会の「経済発展のダイナミズムと福祉基準」に至る毎年の共通論題の一覧表を一瞥しただけで、戦後40年間に日本経済が直面してきた政策課題の推移が明白であり、また総目次によって具体的な研究報告題名（自由論題の報告も含めて）を眺めたならば、これらの政策課題に対していかに研究者たちが取り組んできたかがよく分る。また、理事などの人事移動を含む学会史は、これらの対応過程の「社会的」考察にヒントを与えてくれるであろう。

筆者が初めて経済政策論の講義をきいたのは、戦後まもない昭和23年、東京商科大学（いまの一橋大学）に入学した年であった。当時の一橋では、赤松要教授と山中篤太郎教授が毎年交替で経済政策論を担当されており、その年はたまたま赤松教授の講義であった。（ちなみに、経済原論は中山伊知郎教

授と杉本栄一教授の交替講義であった。）赤松教授といえば「総合弁証法」や「経済発展の雁行形態論」で有名であり、本書第2部にも「経済政策の対象と方法——総合弁証法の立場から」という教授の報告論文（昭和32年）が収録されている。しかし、筆者が議義のなかで特に興味を持ち、学年末レポートのテーマに選んだのは、教授の「供給乗数論」であった。ケインズの投資乗数論が、不況下の全般的遊休生産能力の存在を仮定しつつ、需要増加→生産と所得の増加→需要増加→生産と所得の増加……というように、需要増加の生産・所得・雇用への乗数的効果を論じたものであったのに対して、赤松教授の乗数論は当時の日本経済の現実に注目しつつ、例えば、輸入原材料の供給増加→ボトルネックの解消による国内中間財の生産増加→国内最終財（消費財および投資財）の生産増加、といった「供給サイド」における連鎖反応的乗数効果を論じたところの、まさしく「供給」乗数論であった。当時のいわゆる「傾斜生産論」もこの赤松理論の一つの国内政策的応用であったと解釈することができるであろう。筆者のレポートはこの供給乗数論をケインズ理論と比較検討しようとしたものであったが、ずいぶん時間をくってしまい、他の科目のレポート提出をいくつか断念したのもいまは楽しい思い出である。そして、たんなる輸入経済学の研究でなく、日本経済の現実に即し

た経済学研究の重要性をいち早く学んだのも、このレポート提出がきっかけであったように思われてならない。

戦後の初期段階、たとえば昭和20年代、の経済政策論の状況はどうだったのであろうか。興味深い手掛りが本書の第2部にある。それは若き加藤寛氏の筆になる「戦後わが国の経済政策総論に関する文献展望」（昭和29年）である。そこでは、宇野弘蔵『経済政策論上巻』、上林貞治郎『経済政策論』、長守善『経済政策の基本問題』、気賀健三『経済政策総論』、豊崎稔『経済政策論』、赤松要『経済政策』、野田稔『経済政策論の根本問題』など計13点が取り上げられ、主要内容の紹介とコメントがなされている。赤松教授の本は、総合弁証法など前述のわれわれが聞いた講義がベースとなっている。また、中央大学の長教授の本は、マーシャル、ビグー、シュムペーター、ケインズなどの近代経済学の理論がベースとなっており、この種の参考書がまだ少なかった当時において、筆者などはずいぶんお世話になったものである。

戦後における経済政策研究者の近代経済学の受容過程の一端は、学会年報総目次のなかにある各号の「書評」欄にみられる。毎号10点にも及ぶ書評はすべて外国文献の紹介である。経済政策論に長く大きな影響を与えたところの、ボーモル「厚生経済学と国家の理論」、ティンバーゲン「経済政策の理論について」、ガルブレス「アメリ

カ資本主義——対抗勢力の概念」、ヌルクセ「低開発国における資本形成の諸問題」が早くも昭和27～29年の年報で取り上げられている。なかでもティンバーゲンの本は経済政策モデルにエコノメトリックスを適用するにあたっての方法論を確立したもので、まことに新鮮であった。例えば、「複数の政策目的を同時に達成するには同数の政策手段を使用しなければならない」といったことを学んだのもこの本であった（その後それは気賀健三・加藤寛共訳『経済政策の理論』（巖松堂出版、昭和31年）として邦訳された）。

しかし、これらの輸入経済学を日本経済の現実に立脚しながら適用し、かつ展開を試みようとしたものも現れはじめていた。当時の代表的な研究の一つとしては、本書の第2部に収録されている藤井茂教授の「経済自立と貿易構造」（昭和29年大会——共通論題「経済自立の政策的課題——での報告）をあげることができるであろう。教授はヌルクセの論文“Domestic and International Equilibrium”を参照されながら、自立経済を「対外的な国際収支の均衡と国内的には上の〔完全雇用とインフレーションのない所得水準という〕意味における国内均衡とを併せ実現するもの」と定義するとともに、さらにこの自立経済を均衡成長の軌道に乗せるために輸出主導型成長の必要性を主張し、また中軸となるべき将来の輸出産業としては労働生産性と世界

需要のそれぞれ期待成長率の大きいものが選ばれるべきであるとし、輸出産業の「構造指標」の実証研究をベースに「重化学工業輸出化の条件」を摘出している。いま読み返してみてもまことに新鮮であり、日本のその後の進路を適確に予測していただけて、最近のアジア NIEs の輸出主導型成長の理論的基礎をすでに明らかにしていたともいえるであろう。（ちなみに、現在の日本経済の課題は、藤井教授のいう国際均衡と国内均衡の両立を内需主導型成長のもとで達成してゆくことであろう。）

こうして昭和30年代に入り、さらに10年を経て、昭和40年代を迎えた時点でのわが国経済政策学の状況はどうなっていたのであろうか。幸いにも昭和42年の年報に前述と同じ加藤寛氏が「日本における経済政策論の動向——最近の著書をめぐって」という文献展望論文を書いておられ、これが本書にも収録されている。氏は、学会の共通論題には昭和37年ごろを境に大きな転換があったとされる。すなわち、各国政策の類型・経済政策論の対象・構造

分析・主体論のような政策論の根本問題を中心としたものから、「ビッグ・ビジネス」「地域開発」「転型期論」など日本経済の現実問題に何らかの積極的な政策提言をしようとする方向へ変ってきたというのである。そして、この背景として、日本経済についての実証研究の進展のほか、エコノメトリックスや近代経済学の一層の発展（マクロ経済学の諸領域や応用ミクロ経済学としての産業組織論など）をふまえた政策学研究者層の増大を強調しておられる。この文献解題をあらためて読み返してみると、またそれ以後の重要文献を思い浮べてみると、前述の藤井茂教授の先駆的な研究の方向へ向けてわが国の経済政策学研究者が大きく自立的な発展を始めたのは、やはり昭和40年代になってからであることが実感される。

このように本書は、わが国の「経済政策学の誕生」のみならず、その自立的発展へのテイク・オフのプロセスを物語るものとして、非常に興味深いものがある。